

生物多様性評価に関する概要調査結果と計画提案  
地球研プロジェクト「持続的森林利用オプション」ランビル組  
百瀬邦泰（京大・東南アジア研究センター）

（１）民族植物学

キュー植物園等がサバで行った方法を採用し、現地の人に標本を作ってもらい、標本を伴った利用に関する情報を集める（目標 1 万点）。二次林を多く利用するランビル周辺のイバンと、原生林を多く利用するウルバラムのオランウルについて行う。

（２）島生態学

ランビル周辺では、二次林に囲まれて孤立した原生林が多く見られ、これらは「プラウ（島）」と呼ばれている。島では構成種が単純化するが、単純化は確率的絶滅のみで説明されるか、共生系の崩壊が影響するかを明らかにする。まず可能な限り多くの様々なサイズの島で、棲息する植物のリストを作成する。次に植物の散布力や植物が依存している共生相手の情報を考慮して、面積と構成種の単純化の間の関係を抽出する。共生系崩壊の影響を被る小型の植物を選び、移植実験で適応度の低下を検証する。

（３）植生モザイクと小型哺乳類

原生林の島へ行くと、獣道が四方の二次林に向かってのびている。ヤマアラシ、マメジカなど小型哺乳類は島をめぐらにして二次林で採餌をしているようだ。村では植生モザイクをうまく利用して、貴重なタンパク源である小型哺乳類の個体群を維持している、という見方ができるかもしれない。一方、めぐらとなっている原生林の島では、種子捕食圧は異常に高いはずであり、島の種構成への影響は大きいのではないかと思われる。小型哺乳類の移動、人による利用、島の種構成への影響について調べたい。

FS 期間中までの成果概要

（１）民族植物学

小泉は、ウルバラム地域に隣接するインドネシア側のウルバハウで約 900 点の標本に基づき、約 500 種についてプナン族の原地名と利用法を記録した。百瀬はランビル周辺で約 600 種についてイバン族の原地名と利用法を記録した。

（２）島生態学

国立公園内では、面積ベースの樹木のリストはできている。また、送粉共生、防衛共生についての情報が蓄積している（現在も多くの学生が研究中）。但し種子散布共生については弱い（研究者を呼んできたほうが良いか）。原生林の島については、20 地点程の様々なサイズの調査地が確保できる見込みが立った。

（３）植生モザイクと小型哺乳類

調査地選定のみ。調査内容については、小型哺乳類の研究者（箕口さん）と細部を詰める必要あり。